

令和 6 年 6 月 6 日現在

機関番号：32103

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2021～2023

課題番号：21K20243

研究課題名（和文）啓蒙期フランスにおける教育可能性論と自然誌の交差に関する思想史的研究

研究課題名（英文）The concept of the "educable" in the French Enlightenment

研究代表者

杉山 大幹 (SUGIYAMA, Daiki)

常磐大学・人間科学部・助教

研究者番号：60906692

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,100,000円

研究成果の概要（和文）：啓蒙期フランスの教育可能性論の特徴とその形成過程を自然誌からの影響に着目して明らかにする目的のもと、自然誌学者ビュフォンの教育論を検討した。

得られた主な知見は次の通りである。1) 教育は教育そのものへの関心から問われたわけではなく、人間を動物とは異なる存在として特徴づける議論の論点の一つとして論じられた。2) 「人間と動物の境界」をめぐる議論と教育可能性論の関係の理解にあたっては、しばしば参照されたビュフォンを中心としたさらなる研究が必要である。3) ビュフォン教育論の特徴は、その人間観に基礎を見出すことができ、感覚論哲学者コンディヤックらの人間論との比較のもとでさらに検討する必要がある。

研究成果の学術的意義や社会的意義

日本の啓蒙期フランスの教育思想史研究において、もっとも注目を集めてきたのはルソーであり、そのほかにはわずかにコンディヤックやエルヴェンウスらによる感覚論的教育論が研究されてきたにとどまる。フランスにおける教育思想史研究の現状も大差ない様子である。こうした中で、当時の自然誌学者は教育のテーマについて何を語っていたのか、その一端を明らかにした本研究は、研究の裾野を広げる意義あるものであったと言える。

研究成果の概要（英文）：The objective of this study was to identify the characteristics on the "educable" in the French Enlightenment, with a particular focus on the influence of natural history.

The study examined the educational theories of the naturalist Buffon.

The main findings are as follows: (1) The theme of education was not questioned out of an interest in education itself, but as one of the issues in an inquiry into the 'nature' that characterises humans as different from other animals. (2) In order to understand the relation between the debates on the 'boundary between humans and animals' and ideas on the "educable", further research is needed, particularly on Buffon, who was often referred to by his contemporaries as a major theorist.

(3) The characteristics identified in Buffon's concept of the "educable" can be attributed to his view of the human being and require further examination in comparison with the theories of his contemporaries, namely the sensationalist philosopher Condillac.

研究分野：教育思想史

キーワード：感覚論

## 1. 研究開始当初の背景

近代の教育原理を構成する理念と理論の多くが案出された啓蒙期フランスの教育思想における中心的な論点の一つに、こんにち「教育可能性 (éducatibilité)」と呼ばれる、教育との関係で見られた人間精神の可塑性 (malléabilité, souplesse) の問題がある。人間はいかなる意味において教育可能な主体なのか、人間は教育によってどれほど変えられるのか、といった問われ方にうかがえる、学習主体の属性としての教育可能性への関心は、ルソー、エルヴェシウスを始めとするこの時代の思想家の教育論に共通して確認できる。

啓蒙期フランスの教育思想に関する先行研究は、この時代の教育可能性をめぐる論議を、もっぱら、当時の人間論の理論的支柱である感覚論哲学との関係に着目して解釈してきた (cf. 原 (1976)、坂倉 (2006)、Vergnioux (2017))。それゆえ、当時の教育可能性論は、ロックの経験論哲学のフランスでの受容に感覚論という決定的な枠組みを与えた哲学者コンディヤックの議論と、その影響を色濃く受けたエルヴェシウスの感覚論的教育論における議論によって代表されるかたちで描かれてきた。しかし、人類学史分野における近年の研究成果は、当時の人間論が、感覚論哲学と同等かそれ以上に、ビュフォンに代表される自然誌 (博物学, *histoire naturelle*) が提供する知見によって影響を受けて生成していたことを明らかにしつつある (cf. Guichet (2011), Blanckaert (2004))。近接領域におけるこうした研究動向は、啓蒙期フランスの教育可能性論の思想史的研究に対しても、従来の感覚論哲学との関係ばかりに焦点を当てる整理の仕方を改め、新たに自然誌との関わりを考慮に入れた再検討を迫っている。

本研究において筆者は、これまでの教育可能性論研究が見落としてきた、自然誌は教育可能性をめぐる論議の生成にどのような影響を及ぼしたのかという問題を実証的に検討し、その委細を解明することで、この時代の教育可能性論理解の根本的な刷新のための基盤形成を試みた。

## 2. 研究の目的

本研究では、啓蒙期フランスにおける教育可能性をめぐる思想の特徴とその形成過程を、同時代の自然誌研究からの影響に着目して明らかにするという目的のもと、この時代に最も大きな思想的影響力をもった自然誌学者であるビュフォンによる教育可能性論が展開されるテキストを、同時代の思想家との相互影響関係を視野に入れて思想的に検討し、啓蒙期フランスにおける教育可能性をめぐる論議に対して自然誌の人間研究がどのように関わったのかを具体的に明らかにすることを試みた。

管見の限りでは、啓蒙期フランスの教育可能性論を、この時代固有の特徴である人間への自然誌的なアプローチとの関係の観点から検討するという思想史研究上の課題はいまだ取り組まれておらず、本研究には着眼の独自性があると考えられる。また、ルソーの教育論へのビュフォンの影響を指摘する Jimack (1960) など、自然誌がこの時代の教育思想に与えた影響は、個々の教育思想家の研究において部分的に解明されつつある。しかしながら、自然誌と教育思想との関係を、実証的な文献研究に基づきつつ一つの文脈として描き出そうとする包括的な研究は確認できず、この点に本研究が有す独自の価値を見出すことができる。

## 3. 研究の方法

当初の計画では、『自然誌』刊行開始直後の 1749 年から晩年までの、ビュフォンの思想的変遷も視野におさめることも企図していた。しかし、初期思想の思想的背景の検討に想定以上に時間を要したことや、新型コロナウイルス感染症の流行やロシアのウクライナ侵攻といった外的要因によって渡航が困難となり、後期思想の理解に必要な資料の収集に問題が生じたこともあり、前期思想の検討に注力することとした。そのうえで、本節で以下に述べる 2 つの研究課題を設定し、研究に取り組んだ。

なお、本研究が主たる題材とするビュフォンの教育論的テキストは、主著『一般と個別の自然誌』 (*Histoire naturelle, générale et particulière, 1749-1789*, 以下、『自然誌』) の各巻に散在している。前期に絞ってもそのすべてを取り上げることは困難であったため、特定のテキスト・論点の検討に研究リソースを集中することにした。

### A. ビュフォン教育可能性論とその思想的背景の検討

『自然誌』最初期の教育について語られたテキストの検討から、教育可能性についてのビュフォンの思想の特色を明らかにすること、およびにそれが位置づく思想的文脈の検討が目的である。具体的には、1749年の「人間本性論」、1753年の「動物本性論」を中心とした検討を行った。

#### B. ビュフォン教育可能性論の同時代の思想との関係の検討

ルソーやコンディヤックら、同時代人による教育可能性をめぐる思想との比較を通して、ビュフォン思想の特質の解明を試みた。人間は人間に固有の仕方において「教育可能」として見るビュフォンの心身二元論的人間観との関係で、とくに身体に対する配慮についてのビュフォンの記述を同時代人の議論と比較することに注力した。

### 4. 研究成果

#### A. ビュフォン教育可能性論とその思想的背景の検討

「人間本性論」の一節を教育可能性論についての議論として解釈した。ビュフォンが人間と動物の教育可能性の議論を、自身の立場のデカルトとの近さ、およびにラ・メトリとの遠さを意図的に演出するために利用した可能性を指摘した(「ビュフォン「人間の本性について」(1749年)における教育可能性論の思想的背景」『早稲田大学大学院教育学研究科紀要：別冊』29巻2号、123-133頁、2022年)。

ビュフォンの人間理解の特色は、人間を動物との比較のもとで、さまざまな自然誌資料を活用して理解しようとする視座にある。ビュフォンの人間観は、ときには、当時広まっていた人間論の基本的枠組みである感覚論哲学を流用するかたちで語られた。そこで、一見類似して見えるビュフォンの人間観と、当時主流派であったコンディヤックの感覚論的人間観との比較を行い学会にて発表した(「想像力の馴致：ビュフォン「第一論説」における教育指南の内在的解釈の試み」教育哲学会第66回大会、2023年10月)。

#### B. ビュフォン教育可能性論の同時代の思想との関係の検討

ビュフォンの教育可能性論は、人間に固有の教育可能性と動物の教育可能性との峻別をその前提として論じられた。しかし、人間の教育についての記述を見ると、人間固有とされる精神への教育的働きかけ以上に、動物と共通の身体への教育についての記述が目立つ。何がそれほど身体を重視させたのかを、母乳哺育、巻き産着についての具体的な記述の検討から明らかにしようとした。その結果、精神の働きを、身体(とくに感覚器官)に属する感覚に基礎づけて説明しようとする感覚論哲学の影響が、ビュフォンの身体への関心の原理として見いだせることが明らかになった。関連する研究成果は以下の通りである(「母乳哺育を擁護する論理：18世紀フランスの自然誌学者ビュフォンの場合」『フランス教育学会紀要』34巻、2022年、59-72頁；「ビュフォンの巻き産衣批判に関する一考察：ルソーとの比較の観点から」『日仏教育学会年報』29号、2022年、53-63頁)。

本研究から、自然誌学者ビュフォンもまた感覚論的人間観を同時代の思想家たちと共有しており、その点では従来のコンディヤックを中心とした思想史的整理を活かすかたちでビュフォンを教育思想史に組み込むことも可能であることが明らかとなった。

しかしこの道をとった場合、教育可能性をめぐる思索に対する自然誌からの影響を特徴づけると考えられる、動物と人間の比較という視点が教育可能性論の成立に及ぼした影響、また動物の生態や世界各地の人類の習俗についての知見がいかに教育可能性論の構築に流用されたのかといった問題は、考察の周縁に(あるいは外に)追いやられることになるように思われる。筆者としては、本研究で得られた成果をもとに、今後も、上記の2つの問題を中心に、自然誌と教育可能性論の関係の解明に取り組みたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 3件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 杉山 大幹	4. 巻 34
2. 論文標題 母乳哺育を擁護する論理：18世紀フランスの自然誌学者ビュフォンの場合	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 フランス教育学会紀要	6. 最初と最後の頁 59-72
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 杉山 大幹	4. 巻 29
2. 論文標題 ビュフォンの巻き産衣批判に関する一考察：ルソーとの比較の観点から	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 日仏教育学会年報	6. 最初と最後の頁 53-63
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 杉山 大幹	4. 巻 29 (2)
2. 論文標題 ビュフォン「人間の本性について」(1749年)における教育可能性論の思想的背景	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 早稲田大学大学院教育学研究科紀要：別冊	6. 最初と最後の頁 123-133
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件／うち国際学会 0件）

1. 発表者名 杉山大幹
2. 発表標題 想像力の馴致:ビュフォン「第一論説」における教育指南の内在的解釈の試み
3. 学会等名 教育哲学会
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------